



塔
補
俄
社
家
時
記
彙
考
附
錄
五





雜之卷目錄

賦物之事

兼

和漢の事

ハ

万句十句上自韻

ハ

百韻の式

ハ

米字の式

ハ

七上候の式

ハ

易の式

ハ

源氏の式

ハ

五十韻の式

ハ

四十四の式

ハ

歌仙の式

ハ

長哥行の式

ハ

短歌行の式

ハ

十八公の式

ハ

首尾の式

ハ

表合の式

ハ



雜目



發句の事 ニ 脇句の事 ニ

第三の事 ハ 四句目の事 ハ

月花定座 ハ 去嫌大意 ハ

句數並去嫌 ハ 季節の跨物 ハ

嫌古式八ヶ條 ハ 指合の事 ハ

正花の事 ハ 戀の詞 ハ

切字の事 ハ 發句の格 ハ

押字の格 ハ 抱字の格 ハ

増補 俳諧歳時記草 雑之部 曲亭主人纂輔 藍亭青藍増補

一卷之賦 賦物 貞徳云連哥六、五箇十箇あど賦物にどど俳諧ハ百韻なり

から、非言まで賦も連哥なり、端作りとも俳諧之連哥と書き、云蕉門ハ賦物の沙汰あり、ふんじ心得の、云大略と記す、云あひ草 賦物の文字、且小文字ハ面と幾ハ賦し物の文字、さまりける文字とをわら、云ハ、五箇あど、云ハ、事われ、云ハ、發句ハ、まごひ真ある文字と、云ハ、たとハ、山櫻の發句ハ、云ハ、云ハ、云ハ、山ハ、云ハ、云ハ、故ハ、蜂ハ、云ハ、云ハ、云ハ、餘ハ、云ハ、云ハ、云ハ、一字露韻二字返音以下百韻の俳諧、云ハ、云ハ、云ハ、

賦何衣連哥
年毎ふみまどとと花ハ櫻ハの非

賦何袋俳諧
あれもふら何れなせ々の春

これハ上賦とりよりのあり、端作りの何とハ、字ハ、云ハ、のゆるまる物ハ、云ハ、句中の春とハ、字と呼と、云ハ、

雜

春袋と取る物あり始の句ハ花衣と取るものあり

様 何

天の川水若くらんりりこつね

是ハ後若と取るものあり餘ハ准へたるべし

一字露頭

ちのぢうしよま寝ぬい浮世の杜宇

是ハ句中の寝と音小取あつてゝ

二字反音

籠で飼さらねも高し時鳥

是ハ句中のきもとつて杉と聞あまつ

三字中畧

去る来る年のあゆみや魚千里

是ハあゆみやの字の中と畧して細と取るもの

三字上畧

蝶鳥やちりうひとまも花鳥

是ハとまもの上と畧して丸と取るもの

三字下畧

月ハひとの影ハ目数のあぶらうた

是ハひとつのつ文字と畧して人と取るもの此外四字上

下畧ものハ難波津と上下畧せば庭とあやの事又

五文字中三字畧ものハつむらりとのふと中三字畧せ

ハ爪とあつてひ又一字借とるハ白雪ハ山の額の化粧

如斯これハ句中のけともと聞せたるもの

二字除篇

龍門あらで都へのをさ鱈の魚

是ハ鱈とり入字の魚篇と取て雪とは立し

他 添

鶯やよび哥毎ふとね題目

是ハ毎の字ハ篇と添て梅とあつてちりり

和漢之事

大々俳諧の法と守ふべし和漢ともふ

五句と以て限りとも但し漢の對ふ至り

六句小可及事景物草木亦首教和漢ハ通用せし

百韻ハ一の物ハ和のつこより出づらば漢ハまこと異名よて

用らるるものあり二句の物ハつづて万葉の書分ハ

用ふべし和漢ハ漢ハ韻字と用ふべし漢和ハ和ハ韻

万句 千句 十百韻

支考曰連非の一卷... 百韻と数... 限り...

十巻と... ぬれ... 千句... 十座... 十座のち... 去嫌の... 用捨あり... 表八句... 裏十四句... 九句... 二の表... 十句... 二の裏十四句... 三の折... 二の表裏... 名残の表... 同裏八句... 支考曰... 四のひき... 名残の折... 米字

表八句... 裏十二句... 七句... 二の表... 二の裏... 三の表... 三の裏... 支考曰七十二候と... 百韻と三折... 易... 表八句... 裏十二句... 七句... 二の表... 二の裏... 同裏八句... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

帖ふ... 源氏... 支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

雑

十八公

表十句... 目九句... 裏八句... 七句... 〇十八公... 千歳不変の松と象りて数とあり

首尾

短哥行

表四句... 月... 裏八句... 初句... 名残の... 表八句... 目七句... 同裏四句... 三句... 〇長

長哥行

表八句... 七句... 目七句... 重... 〇長

歌仙

表六句... 目五句... 裏十二句... 〇支考曰哥仙の名目の風流也... 十八番の哥合あり... 〇支考曰哥仙の名目の風流也... 十八番の哥合あり... 〇支考曰哥仙の名目の風流也... 十八番の哥合あり

四十四

支考曰四十四... 五十韻の愛... 〇支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

五十韻

支考曰源氏と... 三折あり... 源氏の愛数... 中項の名目あり... 源氏の六十

表六句目月裏六句目花○支考云首尾の吟二座の時
宜ふ、或ハ奉納の諸願と祝し、或ハ歳暮歳旦の賀、
始終をこのよの意あり、ハ六々ともハ々とも

表合

表と裏の首尾と合せ、月花二座模様、
八句目月 **西華集** 支考 凡例ニ云此表ハ神祇あり、
あり、意無常と云、ハ名所とのハ人の名とのハ二卷の
始終と云ふつゝ、ハ心あり **湖東問答** 去来云去秋考

爰ハ旅寐して卯七と表合あり、我ハ諾て曰ハ表合ホの
非諾ハ尋常の式と替るべし、表の内ハ一巻の姿と云て
去来亦ともまゝ、ハ用とまゝ、ハき事あり、ハくハ一段
面白く、ハと答ぬ、ハ二子

發句

諸抄云一座の巻頭
ふれハ宗匠貴人老
よて翁ハ聞かざる、
人の外あるべし、ハ句の体伸く、ハ和く、ハ詞やまら、
心をのり、ハむ、ハ切字の道理ハ切字の条ハ注せ

脇句

發句の時節と違へ、その餘情をいふべし、
發句神叙意無常時宜述懐、ハ脇句も同
く、ハこの何らハあふ、ハ發句難多、ハ脇句難多、ハ諸抄
云韻とてあそめて留る事なき、ハあはれ、ハ切者の業

あまぞ、初心のほろとあつと、ハ云、ハいま、ハあま、ハの
あそこの故と明と、ハ青藍按、ハ脇ハ奇の下の句ハ
して上の姿、ハけ結ぶ、ハ正格、ハ但ハ發句脇句ハ限
ハ格、ハと未練、ハしてあそ、ハ留る時ハ意、ハ後、ハて

脇句の体と失ふ、ハ初心の、ハあ、ハあ、ハあ、ハあ、ハあ、ハあ、
むた、ハこの故とあ、ハあ、ハあ、ハあ、ハあ、ハあ、
意切て脇句の体と失、ハ字、ハ留、ハあ、ハあ、ハあ、
べ、ハあ、ハあ、ハあ、ハあ、ハあ、ハあ、
よを、ハ初時雨芭蕉、ハ又山茶花、ハ病、ハ由、ハ冬、
の日霜月や鶴の行、ハあ、ハあ、ハあ、ハあ、ハあ、
あり、ハ芭蕉、ハ曠野、ハあ、ハあ、ハあ、ハあ、
春の草荷兮、ハ打、ハ蝶、ハ夢、ハあ、ハ芭蕉

第三

諸抄云、ハ大高、ハ脇句ハ轉、ハあ、ハあ、ハあ、
ハあ、ハ三の本意ハあ、ハ第三、ハ留、ハあ、ハあ、
ハあ、ハあ、ハあ、ハあ、ハあ、ハあ、
發句の姿ハ轉せ、ハあ、ハあ、ハあ、ハあ、
とオ三の格、ハあ、ハあ、ハあ、ハあ、
少て下と結ぶ、ハ大、ハ意、ハあ、ハあ、ハあ、
少て下と結ぶ、ハ大、ハ意、ハあ、ハあ、ハあ、

故ふこふ人の留すてまへり

但しこふ人の手本

れらるハオミの格はとやうり定てまへり

を意を残りて下句ふ及わらへり

いふ道理ととまゆへり句作は意ふまへり

花隼馬骨の霜ふ咲へり杜園同上三種槍山家の体

と木の葉降 芭蕉朝顔の巻三井落

出ふりり 芭蕉猿蓑三雲雀鳴小田ふ上り

珍頑定てまへり

ふりりとまゆへり

四句目

諸抄三云ありたり

かやまへり

と残り四句目ふ及む

と四句目の格をも故ふ作意と求めむ

月花定座の心得

去來云花ふ定座ふ

と用ふ花と引上るふ二品あり

き人ありて其人ふ花と望む

季と出して花と望む

つハ貴人功者の人他ハ

待む花と作る又雨吟の時

呼出ま者の過り

云月花ハ一巻の傍り

合の辞義もゆくり

へいこむ

故と知るときハ月花の座

ハ自在あり

月の障りて止事と得

あり花ハ

去嫌大意

貞言式

嫌とハ天象地形より

ふこら耳ふ

とて我門ハ一理方通

言ハハ濫觴

連奇の家ふ

例ふ容情の行ぢふありやうばの袖あるは洞門
 お違ふ三入雲三雲三曇ちのころに二句去の式を
 どと雀門一風の姿のころに誰れ二句ふ付べらん
 古式牡丹ハ一座一句の物故不俳ハ廿日草深見神ホの
 異名今今今のあづからやとひひと音と訓
 かいこのこと同じ一座の百韻も同じ物の二出らん
 實作者の不機轉らふへしこの牡丹のけやん
 踏皮の牡丹との或ハ牡丹餅らふまは植物の牡丹
 わらざれ折と去面とつて五句も三句もさう
 ホと異名らひ異体この古式今式の差別餘は准て
 ちとべし世の流布の能式ハ却今より
 抄中いふ去嫌ちと
 容情の行ぢふありやうばの袖あるは洞門
 式とあつて貞字式よりなる

句數并去嫌

表八句小嫌ふ物 神我意無常迷懐懐旧名
 所同字病体人名嫌ふといふ
 と諸批いふより青蓋云病体人名嫌ふといふ
 初懐紙 三雪村が柳の行棹とと冬の日 月影
 小利休が家と鼻ふけ 句塞 三西行が軍法をり小
 夜あけて三の作例あり桜むるハ風雅小富る古人の名

表のころに三句つて三句の間に三句の間に三句の間に
 と多しあつてし 権兵衛ハ兵衛のし 曠野 三 填注つ
 久ねのけりより三句の病体ありまも源氏物語
 ちのけりみちのけりみちのけりみちのけりみちのけり
 春 三句より五句までつて三句までハ捨て春秋ハ
 景物多しをありハ春と春秋と秋五句去
 夏 一句より三句までつて三句より多くハ夏
 冬ハ景物少くをありハ夏と夏冬ハ夏
 句去 神祇 一句までつて三句より多し
 あり 神祇と神祇 三句去まつて
 せんの神祇と神祇 三句去まつて
 釋放 神祇ハ 迷懐無常 一句までつて
 同じ 迷懐無常 三句去まつて
 と引合せて三句より多しあり無常をり三句より
 下迷懐も同じハ迷懐と迷懐無常と無常三句去
 戀 二句より五句までつて三句より多し
 ○恋と恋三句去今今今去と以後の戀
 山類 一句までつて三句より多し
 水邊 山類ハ
 人倫 山類ハ

二句より多く、人倫、居所、
一人倫、二句去あり、居所、
く〇居所と居所、二句去

旅休、夜分、生類、
旅休、二句去あり、夜分、
同上、生類、二句より多く、
虫と獸、魚と鳥

の如く、衰して二句去あり、虫と鳥、
植物、二句より多く、
〇

木と木、草と草、三句去あり、
名所、國の名、
二句より多く、
〇衣類

〇名所と名取、國の名と
名取、二句より多く、
〇衣類、三句去あり、
衣類

降物、
二句より多く、
〇降物と降物、二句去、
從軍物

上ふ、天象、食類、
同上、食類、
二句より多く、
〇食類と
食類、三句去、
飲食と

時分、
夕時分と夕時分、
朝時分と夕時分、
三句去、
夕時分と朝時分、
打越をきり、
二句より多く、
〇火体と
火体、三句去、
瓜体同断、
支休、
三句

火体、風体、
火体、三句去、
瓜体同断、
支休、
三句

去、
二句去、
車、馬、舟、頂、間、折、
生類、添水、
案山、
子、鳴子、雨、露、
手、袂、禱、
偽、
誠、
月、朔、日、二日の日の字、
月、日、星、
今、
け、
の、
た、
ぐ、
の、
枝、
拳、
違、
わ、
る、
も、
一、
理、
万、
通、
と、
以、
て、
餘、
ハ、
准、
へ、
る、
る、

三句去、
同字、
月、月、次、の、月、
正、
花、
小、
草、
木、
の、
花、
竹、
小、
竹、
田、
風、
小、
木、
の、
字、
餘、
ハ、
准、
へ、
る、
る、

五句去、
同季、
霞、
田、
竹、
月、
涙、
夢、
枕、
煙、
船、
路、

七句去、
櫻、
小、
花、
白、
小、
香、
閨、
小、
寢、
の、
字、
神、
小、
神、
樂、
餘、
ハ、
准、
へ、
る、
る、

季節の跨物、
後、
の、
彼、
岸、
逆、
の、
峯、
入、
と、
断、
り、

數入、出替、彼岸、峯入、
も、
と、
も、
秋、
季、
ふ、
つ、
て、
ハ、
秋、
と、
ら、
い、
し、
數、
入、
出、
替、
も、
同、
じ、
鷺、
鴨、
目、
白、
鳥、
頰、

白、瑠璃鳥、鷓鴣、
白、
瑠、
璃、
鳥、
鷓、
鴣、
春、
秋、
の、
季、
ふ、
つ、
て、
ハ、
春、
と、
ら、
い、
し、
歸、
來、
の、
二、
字、
と、
断、
ら、
る、
る、

其時其季、
其、
時、
其、
季、
と、
ら、
い、
し、
掠、
鳥、
櫻、
鳥、
菊、
戴、
豆、
廻、
し、

雜

山雀、日雀、四十雀

この類、秋のくくふ耳、もれば、掃ここも行とも遊

駒鳥

春ふれど、度るらん、秋の、て秋も用ふべき也、給

鯉、掛

年の暮と定む、れど、今の例あら

野遊

春、摘菜の遊びより、秋、草、狩の真ありて、決て春秋の二季

鶉飼

鶉、毎、桃の節、供ふと、まうて、菊の節、供ふ終り、れども、鶉舟、春の気、ふき、故、夏と秋との二季ふ

節供

何の節供と断、秋の三季ふ

鮎、藻

藻ふ、上下の字と断、鮎、つれぬ、若らん、落るとい、給

祭

四季ふ、物、祭、鷹の類、れど、其季の名目とて、四季の差別とあせむ

俳諧、多用あれ、其名目と断、及び、其、の季ふ、て、決て、四季、用、以上、貞亨、式、より、抄、出、す

古法可有取捨事、杜鵑、深見草

柳、櫻、鶯、螢、杜若、芭蕉、螭

牛、鶴、鴿、此十品、象物、の数量、あり、古抄、あり、此、類と音訓、替、異名、呼、で、ハ、三ツ、と、色

定、の、今、古今、の、取捨、と、ハ、此、謂、あり、右、八十品、の名目、と、舉、て、万物、万象、の、九例、と、あせ、む、あり

去嫌可有斟酌事、父、母、男、女

此四品、人倫、の、九例、あり、主、誰、身、獨、媒

此五品、人倫、の、唾、あり、人倫、と、僧、寺、此二品、古式、定、て、指合、と、ら、む、と、ら、む、と、ら、む

雜

居所しよしょ△非ひむとといいども△今式いましき△親王おんおう△皇女すまひめ△天童てんどう△

天女てんじよ△帝てい△御門ごもん△仙洞せんどう△新院しんいん△鬼おに△

佛ぶつ△此十品ハ古式ハ色々の説せつれども人倫にんりんあり二句づく去きべきなり御門ハ居所しよしょ三句去きべき

若菜わかしな△郭公くわくこう△松虫まつむし△水仙すいせん△水鶏すいけい△

三日月さんげつ△尾上おしの上△此七品ハ會意かいいの名目なめいあて決けつして

二字三字の意いと會あめてその名なを作つくる故ゆゑあり人字にんじと造つくるる六書りくしよの一名いちめいあり

古式こしきハ此二品ハ雪ゆき四ツ雨あめ二ツとあれども△虫むし△魚うい△

馬車うまぐるま△飯いひ△饅頭まんじう△茶ちや△酒しゆ△此八品ハ日用にちようの物

有あ△松まつ△子この日ひ△月つき△更さら△科か△花はな△

芳野よしの△此三品ハ連哥れんかの沙汰さた△鐘かね△鉄てつ△醬じやう△

瓜木うりき△妻つま△敷ふ△木き△篠ささ△小こ△佐さ△々々△羅ら△

翠簾すいれん△昔むかし△水邊みづべ△山やま△伏ふし△山やま△嶺のり△夜よ△

分ぶん△此七品ハ古式こしきの嫌きらハ物ものあれ△開あ△伽か△筵しん△火ひ△

轉ころも△寢ね△眠ねむの字じ△起おきの字じ△虫むし△砧きぬ△

此八品と古式こしきハ夜分よぶんと定められども今式いましきハ夜分よぶんの意いあて指合さしあと繰くるる

鳥帽子とりぼうし△綿わた△木棉もくめん△夕立ゆふだち△雲くも△

雨あめ△笠かさ△鷹たか△狩かり△此五品ハ古式こしきハ附句つけくと嫌きら

嫌きら△へ△總も△て△彌や△生ひ△師し△走そう△此二品ハ古式こしきハ

古今ここんの違ちがあり△彌や△生ひ△師し△走そう△此二品ハ古式こしきハ

も異名いみなの月つきを

附へしとて打越と嫌ふ
ハレハ古今の通式あり

指合可有分別事 △あそとあり △

頃とあり △ふとあり △てとあり △
此四品ハ

古式ハ大事とあれど △老 △親子
此二品古式ハ
今式ハ子細あり

今式ハ分別 △鳴子 △網 △花鳥の繪 △花
もべき意ぞ

小櫻 △楓 △紅葉
古式ハ鳴子ハ指と守る故
植物子二句去とやいふ意

のこびひふるささハ分別及むぞとて生類ハ二句去へ
細魚鳥と二句去の例あり或ハ草木鳥獸の絵ハ
其季くと持あふ生類植物ハ嫌をもとやとて
雑とあさハ論あふ季と持三句去去きもこれら
ハ絵の月喩の花の例あり凡雅の賞翫とあせる花
ちの二品と櫻と花ハ面とほりて輕く楓と紅葉ハ折と

嫌ひて重し何とて二品の差別あり花ハ三春の艶とい
ひ紅葉ハ三秋の色とひて櫻と楓ハ其体あり花ハ紅
葉ハ其用ありこの故ハ花ハ櫻ふありと櫻ふありと
もわくもてハ我門の正花論ありとや爰ハ論せハ櫻
も楓も花と紅葉ハ面とほりて只一ツ
ありきとや異体ハ例の數とささめぞ

千句有一物之事 △鬼 △虎 △龍 △

女
此四品ハ連俳の差別あり新式の一座一句といふ
所ハ凡五十余名あれども多くハ連哥の用と
して俳諧ハ不用あり鬼味憎といひ

龍門といふ異体ハ例の數とささめぞ

花鳥有二物之事 △柳 △櫻 △鴈

△燕 △鶯 △菊 △千鳥
此七品ハ古式より
一座一句の物あり

とて花鳥の二品ハ四花八月の賞翫ハ效ひて一
座ハ二句去有べきとあり花鳥の名ハ代と考へし

△冬牡丹 △冬椿 △冬梅 △紅梅 △

緋桃 △梅櫻の紅葉 △山吹 △郭公

此八品ハ花鳥の中を只一句をて二句ハあるもの多
の九例あり此段の詮用ハ二句ありき異体ハ只一をて
二句ありき同体ハ二とあせる
二句一意の用とあききあり

日用可輕物之事 △昔 △曉 △庭

△垣 △袖 △襟 △湯 △汁 △文 △使

此十品ハ古式ハ一ウニウとあれ
と折とのみ替てハ四もあるべし
△照 △曇 △泣
△笑 △植 △芍 △眠 △覺 △起 △居

此六品ハ支体の幹をて一語
の用多けきと折と替て四を
△目 △鼻 △耳
品ハ日用ハ多用あるに面と替
てハ七つもハツもあるべし

△口 △手 △足
此六品ハ支体の幹をて一語
の用多けきと折と替て四を

有り

尤可不審旋之事 △老 △福神 △

親子
凡中古の式目と論をるふ第一連排の用と
不用とをて一語をて連奇ハ艶詞のあきと

事ありこれの中を不審とてき沙汰ハ老と述懐と
表ハ句ハ嫌へと福の神ハ嫌とて色さるハ被のハ理
窟あらめと命の字とめて述懐とあり親子と
つげくハ述懐とありこれハ何故か

稻妻 △電光 △烏鵲の橋 △龍 △民

の龍
古式ハ稻妻電光と天象ハ嫌とてハ鳥
鵲の橋と生類ハありてハ龍と生類ハ嫌

むととも武の竈ハ居方ふわらむとて今式の不審
のまふ用ふべき也但し今式の道理ふまうせて嫌之
△青柳 △葦 △櫻人 古式は青柳詠ふハ
春として植物ふわら

むととも「葦詠ふハ秋ふわらむとて生類ふとわらむと冬ふわら
櫻人詠ふハ春の季と持て植物は三句より入倫ふも二
句より入り同三品の詠物は三色のふらひあつて今式は
三別の道理ありとも道ふ一貫の日あつて今式はより

△去嫌ハ一 △泪の露 △泪の雨 △青楓 △
例々々々々

掬鳥 泪の露ハ降物ゆて泪の雨ハ降物ゆあら
むとて今式は御今の細款も不審ふり青楓と

秋とつては察するも姿情のふらひあつて青の字はあつて
秋の姿はわらむと楓はあつて紅葉の体あつても若楓の
下とてあつて若楓ハ夏あつて今式は青楓もあつて今式は
而所ふ雨注のふらひあつて今式は不審の不審とや
いふと掬鳥と雜ふらむと掠鳥ハ勿論まて菱喰も豆
まもも今式は実と好むる名あつて今式は論ふて秋とてあつて

曾不及論物之事 △雪小霰 △椿

小花 △蓮小實 御今ハ雪ハ霰ハ附句と嫌ハ
む椿ハ雜あり花と結び今式は

春あり蓮の実ハ夏あり蓮ハ花とて不実を結ぶ
物ありといふこと今式は曾て論あり

右古式とむとく蕉門一派の確論まづ蕉翁の
授記こと貞享式小載より爰ふ其大畧を記す
の今本書ふ委し議論あれば往て今式は此一の
外の去嫌ハ御今 芋環 通俗志 芋ふもづい
畧

指合 貞享式と合とりふて今式は同字
そまもてとてとの清濁はあつて今式は

き耳ふりらぬゆゑあり数字も送字も旧式より輕
こと今式は一盃ハ山ひとつのてき語路の拍子の耳ふり
りらぬハ二句以下ハ決してとらひびづらむと云 余ハ一理
万通とて准へ知るべし但し初心のふらひあつて今式は古

雜

式みわけとる
と左ふ抄出ス **い** **いづく** ニツ〇折と替じつこ
ぢぢちとひつこ、五夕

物とまふ **い** **いづく** 一夕の物
とひつこ、二夕去きり

まぶ **い** **いづせん** 一ツ〇上の五文字ふやく字あり
いづせん留まふやく字あり以上

ニツの内今一夕 **い** **いづく** 三夕
去 **は** **はな**

の内まめ **い** **いづく** 七夕去
むろ

とむ 濁音ニ
夕去 **い** **いづく** 上夕の小留
三夕
去

ハ一座一夕の物とま且あふありとより青藍按まる
ふ上夕の意とうけ結ぶと下夕の格とまらとちらひ

あふ **い** **いづく** 意残りて下夕
の格とあまむ故はあふありとのい **い** **いづく**

よ めふとの小留
折合もらう **い** **いづく** 苗小限
ちぢニ

句去 **ぬ** **ぬとぬ** とんぬとまうんぬ
あり、**ぬ** **ぬとぬ** とんぬとふのぬ
とんぬとふのぬ

但し折合 **ぬ** **ぬとぬ** 二句
とまら **ぬ** **ぬとぬ** 二句
とまら

ん 七句去ありぬらん
三句もをぬ **ぬ** **ぬとぬ** 二句去あり
ちらう

る 青藍云紐鏡より五段の
るのと七段のつる **ぬ** **ぬとぬ** 二句去あり
ちらう

る と打越るもきらるる
うら貫るる **ぬ** **ぬとぬ** 二句去あり
ちらう

ふ 嫌しぬ例ハ同巻ふ終夜尼の持病と押へる
あふむり残る名月ハ初ハ小葉掛下せ **ぬ** **ぬとぬ** 二句去あり
ちらう

敷て この外作例
二夕去あり残 **ぬ** **ぬとぬ** 二句去あり
ちらう

る るらんの類
か **ぬ** **ぬとぬ** 二句去あり
ちらう

ふ く送字の類あり附てはらるる
ふく送字の句ふ送字の句と附ると二折ふ一ヶ所 **ぬ** **ぬとぬ** 二句去あり
ちらう

ふ く送字の類あり附てはらるる
ふく送字の句ふ送字の句と附ると二折ふ一ヶ所 **ぬ** **ぬとぬ** 二句去あり
ちらう

ふ く送字の類あり附てはらるる
ふく送字の句ふ送字の句と附ると二折ふ一ヶ所 **ぬ** **ぬとぬ** 二句去あり
ちらう

アハミトト **カ**形 発句の外は願のガふと今二句
多くハセバ

カト **カ** 去ニウツウツウの
あり、カト **カ** 去ニウツウ去

知或ハサセトコトヨマセ
さよの類二句去あり、**レ** 下知のレニ
レ 去ニウツウ去

ぞとぞ **ツ** 去ニウツウツウの
折とウ
ツ 去ニウツウ去

な **ナ** 去ニウツウツウの
あり、あり

ある、あれ、あれや、あらし、なると

皆附ウ **ナ** 成の字の意あるが附
と嫌ふ、ありふ成 夕も打越もきららむ

アハミトト **ナ** 並びるも打越るも嫌む
盛り御室の路の人通アハミトト菜種乃

野ハ錦あり **ナ** 作例多し、あれや、あらし、あらん

七句去あり一座 **何**の字、幾の字 附ウと嫌
三ツとわんを

あざら **ア** 五ウ去 物ふあひそりありに
あり、又つぎせうふのあり

ら **ラ** 去あり、らーらーらーらんとら

ん **ン** 去ニウツウツウの
あり、あり

う **ウ** 去ニウツウツウの
あり、あり

や **ヤ** 折とまらむ、あひね

ま **マ** 折とまらむ、あひね

け **ケ** 去ニウツウツウの
あり、あり

け **ケ** 去ニウツウツウの
あり、あり

け **ケ** 去ニウツウツウの
あり、あり

雑

こ 一座一句千句 **て**

とあ
上句にて留三句去あり下句のていふふ
いふふ同じふ文字の条ふ在り

せ
つれなき恋しき
の類二句去あり

めめく
色めくの
類五あり

志
二句去ありとまありふ
まはし一座三句とま

志
過去のてと過去のて二句去あり現在のて
過去のてと現在のて付てもうていふ

志
清濁うりこも二句去あり
の腰折合てとことと嫌ふ

て留
九の
恋しきまひりき
類二句去あり

せ
下句の内一と二句
出らふ折と替以上三

せんとつ詞ふするつ詞
二句去あり
すつとす

別吟
せんとせ
あらむきき
の類二句去

折合
別吟とてつを難波と波大和と大紫と筑
紫のとていふこと同字別吟とらふ附とを嫌ふ

御今折合
御今折合といふこと下の中ふ花と見んこと山ふ入
あつふのふ句と留の上のつと附む又前つはとつふ

あど
秋の夜の明もつるまを月とていふふ句ふ消ふられて
あど腰の折合ふて文字とまへつとまへの入義あり

ま
ての字ふ限らむて文字ふ文字を以て字皆目前とて
まをてあつてはてふとあつてて留ふ嫌ふは夫も
捨て果てあつててか

附
附らるはまらふあり

正花之事
花は往古ハ三本ありとを勅許あり
宗祇もあつて名残の化あり

我家の正花論
花ハ櫻子あらま櫻子わらふも
名残の花と添て百韻ふ四つとていふは名残の化あり

ふとわらむ **宇陀法師** 詩六 花と櫻と思ふ作者は

り唐詩の花ハ牡丹あり吾朝詩奇の花ハ櫻あり連能

の花ハ櫻ありとあり牡丹ありとあり花ハ貴翫の物名

と任まふとバ花子櫻付る事あり何と云花の句櫻ふ

らむ花の櫻つる事あり茶の出花藍の出花正

花と云ふと先師 蕉 申まきき猿蓑の俳諧も残の

花ハ櫻ありこれを見誤る正花ハ櫻まゝ人もあつけ

り櫻正花ハあつむと初心まゝのこゝろあつむ口傳あり云

春の正花 **花ハ杜鵑** 古式夏と云 **貞享式**

今按むるハ漢家の

詩ハ杜鵑とも蜀魂と云ひて暮春の景物あり

ハ幸ハ其例と假して暮春の用とあはせしむるハ本よ

つと鶯の巢ハ結むと決 **心の花** 春のはの部花心

して春と定むべし云 **心の花** 春のはの部花心

の花ハ正花あり故に春のはの部ハ花字のこゝろ

るこれ正花あり故に春のはの部ハ花字のこゝろ

るこれ正花あり故に春のはの部ハ花字のこゝろ

夏の正花 **若葉の花** 貞享式 今按むるハ

月花ハ凡雅ハ一巻の

飾あり踏きける物ハ加減して四季を自由な配ふ

べりし若葉ハ花と結びて決して夏と定むべし云

残る花 夏ののれ部 **餘花** 夏のよの

部ハ注し **秋の**

正花 **花火** 夜分 **花相撲** 植物

あり **花燈**

竹籠 夜分あり植 物あり

冬ハ正花 **歸花** **餅花**

雜ハ正花 一書ハハハ雜の花ハ花前ハ

至て夏冬の季出く時

花と附る用と云ふべしされと次の附句ハ春季と云

るこれハ例ハ花と重じくる蕉門の捌あり云

青藍云蕉翁のくもられらるいハ及まむ諸門

人の俳諧ふと雜の正花と云ふとあつハ好むまじき

事ハ **作ハ花** 植物ハ二 **花塗** 漆の事あり

也 **花** 植物ハ非む **花**

ういらぎ 鞘敷ハ模 **茶の花** 香 食類あり

様あり **茶の花** 香 植物ハ嫌

雜

花形 小鼓より植 花子此狂言 狂言

燈火の花 植物よりあり 花の川 分類

花紅葉 青藍云 炭俵集 貫之が梅

角句と秋季の正花とせる例あり

貞享式 我家の詞にて意を

戀の詞

一字の嫁と娘とを野老傾城の各目と
當句の意の安情なきとき、例の詞と意をせし
ゆ多し他門より意と一句にて捨るといふ方外の沙
汰ありし、意ハ陰陽の道理あり、三句より五句ハ
時ふまゝのひて意と一句にて捨まじき故なり云
支考云意の一条ハ今式の大事なりて意ハ一句より
捨まじき陰陽の理のこといひてその外ハ未然不定
りことあらし其故いふことあり、詞の意ハ字あり

心の意ハ句あり故にその時々の句ふむるを
句情ハ兼てさるるなり、たとハ此項の附句ハ「普請
場の飯も一度不起をうひ」當の先ハそと手拭
といふ附句ハ普請場の臺所ハ只今膳と居んとてこ
らの埃と掃きぬるをわたり起出る人あり、折釘
の手拭と帯あり、及び越えし出し、大工木挽
の立まじきて物の世話、まじみあり、三句目の作者
意をあり、打越のこびと轉せんと起情の附方を
棄てて思へば、おのづからつれあきて、傍輩中の
まのぐねふ床の下ある率也川のいづれぬ顔こそ
あはれ、あはれ、前句の作者より、つて意の心ハ
なほ、後の眼力ふさてと、意の安情と見附これ
ハ彼と我との二句とありて意ハ決して二句この心
○青藍云蕉明ハ意の詞と定まらば、あはれ、心の
何れのハ言葉のそとらき、あて、意ありぬものも意句
とらまを、作者のそとらき、とこれ、あはれ、意の
詞ふまじきて句作まじき、と許ハ云、晋、句ハ物と
し、狂ハ男の、と云ハ意の詞一字あり、

踏込る意の句あり近年俳書にて意の詞と持
 づくその胸中せまきことあり云○意の詞ハ
 意の志なり多くありて彼ふゆづりて
 ありと記しし注譯とらる初心の便
 逢意、別る意、忍ぶ意、恨む意、待意、待
 戀、思ふ意、思ふ意、思ふ意、絶る意、絶て久し
 き意、夏意、契る意、あつる意、物思ふ、うま
 意の奴、意衣、意草、意の病、思ひ、思ひ川、
 深き思ひ、思ひの山、思ひの烟、思ひ、相思ひ、
 思ひの情、うら多く思ふ、思ひの淵、思ひ草、思ひ花、
 思ふ、情、深き情、薄情、情、ふげの情、情、
 等閑の情、泪、泪川、泪の淵、涙の海、涙の雨、
 りと心あり、泪、袖の涙、袖の露、袖の海、涙の籠、
 袖の雨、涙の川、海、恨、うらこの山、恨、夢、
 泪とくくつあり、恨、の海、夢、夢の
 夢の通路、夢のうらふ、夢のたぢち
 通ふ

雅語譯解夢の

まくもちト云

智入、娘入、婚禮、待女部、目、桶

新枕、若後家、若衆、寺若衆、男色、町若衆

念者、男色といふ、一の谷嫩軍記、六弥太屋敷の段室番元印付

是の慈居ま、脚子息の六弥太ま、
 同年ならぬの親子の中、畧親ごま、
 のやふ大事ふま、
 まいっおとう念者と見分とらふべきこと、親分といわ

とらふ、下畧、玉海集、附、句、
 別の袖、逢夜、逢て年、
 限光、密言、兼

言、私言、文、王立早、艶書、千話、
 文の色を、

袖引、尻つゝ、門やう、辻やう、

前、
 けいせこ、
 やのへ人住めるあうと事

契ちぎり 二世の契ちぎりの 契ちぎり 伊達いまだ 身み 契ちぎり

獨寢ひとりね 人目ひとめ 人目の関ひとめの 目め 目め 神祈かみひめ

憂別うれい うき人 色いろ 色いろ 色いろ 色いろ 色いろ

名な 名な 名な 名な 名な 名な 名な 名な 名な 名な

心こころ 待まち 待宵まちよ 待宵まちよ 待宵まちよ 待宵まちよ 待宵まちよ 待宵まちよ

十寸鏡じゅうすんきょう 占うら 占うら 占うら 占うら 占うら 占うら 占うら

姿見鏡すがたみきょう 占うら 灰占かいてん 夕卦ゆづけ 夕卦ゆづけ 夕卦ゆづけ 夕卦ゆづけ

坊主ぼうず 坊主ぼうず 坊主ぼうず 坊主ぼうず 坊主ぼうず 坊主ぼうず 坊主ぼうず 坊主ぼうず

比丘尼ひしゆに 比丘尼ひしゆに 比丘尼ひしゆに 比丘尼ひしゆに 比丘尼ひしゆに 比丘尼ひしゆに 比丘尼ひしゆに 比丘尼ひしゆに

二心にしん 二心にしん 二心にしん 二心にしん 二心にしん 二心にしん 二心にしん 二心にしん

蓮れん 蓮れん 蓮れん 蓮れん 蓮れん 蓮れん 蓮れん 蓮れん

懸想けんさう 懸想けんさう 懸想けんさう 懸想けんさう 懸想けんさう 懸想けんさう 懸想けんさう 懸想けんさう

常陸ちやうりく 常陸ちやうりく 常陸ちやうりく 常陸ちやうりく 常陸ちやうりく 常陸ちやうりく 常陸ちやうりく 常陸ちやうりく

雜ざ 雜ざ 雜ざ 雜ざ 雜ざ 雜ざ 雜ざ 雜ざ

喉のど 喉のど 喉のど 喉のど 喉のど 喉のど 喉のど 喉のど

子こ 子こ 子こ 子こ 子こ 子こ 子こ 子こ

實情じつじやう 實情じつじやう 實情じつじやう 實情じつじやう 實情じつじやう 實情じつじやう 實情じつじやう 實情じつじやう

雜

してだぐり恨らう恨ら
垣間見 物のひまより

虫の印 守宮の血と女の

肘ふぬくおけい 一期消せむどり 春心と動うせ忍

ち消さう 博物志ふとん 守宮ハ蠅蛭あり石

龍子と名く守宮の名ハ秦の始皇帝官人の私

ありし事とおひてその朱と飼ひて宮人ふ点ま故

小守宮の名 **轉合中戀** 中あて取らうら

薄中心中、やりあり、惚らう

惚らう心、後よび 後妻と うそわらう

和名抄後妻 和名室波奈利 うそあり打 妻と離別して

後妻とむつやふそのまうこふよりこ前の妻まこ

しき女ごのまうらめし某の日某の時うらあり打ふ

ゆくごまうといひあり某の日ふ至れむ前妻とえに

めしとまごがふかどむおのくもあひまうのむのま

もちて後の妻のくく行臺所あり入るこ打まらう

後の妻のこくまをこまごかこまごのこおまこ打ま

しと用意まごまごがひふあらしふまご前妻後妻

の媒せりの妻と待女郎よありし女と双方の中ふ

入わらういあごめとうらまありふひふ男とあしや

事ハせざうしとあへ **口記室物集** 小ハ後妻打の

とまそえん 古くありあり 事あり **玉海集** 夕浅

茅生ふらもあり打のちまらて貞徳〇醒齋云永

禄元龜のころまごこ有 **ふやまふま** き

雑

めく 曉起 暮る心より 意の別と衣々とのしやせ

下紐 身とあふ 指切 髪切 股

突尻目つらひ 思ひこま 年未深く

おのりける中の人の中言う又思ひの外ふ
仇あまき支ありしとこの思ひの

偽り

難面、うとほも、
伏、背きくくの

中、
心中に恨むことの出来て解

何事も背き、
怒む、嫉妬、艶、物の怪

意の恨みありあせ、
後めこき、
雅語譯解後

生霊、死霊とりふ、
枕あらし、
長枕、二つ枕、
うを枕、手枕

近、
近まる、
近くしてこれ、遠目より

仇めく、古は、
見捨らる

忘ら、親さる中、
義ありたる親と

又ふ、思ひ、親の制し、
二道かくる、蜘蛛のおとまり

又ふ、思ひ、親の制し、
濡衣、
あ、名のつこと
ふいふ、或書云

又ふ、思ひ、親の制し、
二道かくる、
日本紀わ

又ふ、思ひ、親の制し、
二道かくる、
云

又ふ、思ひ、親の制し、
二道かくる、
云

又ふ、思ひ、親の制し、
二道かくる、
云

又ふ、思ひ、親の制し、
二道かくる、
云

又ふ、思ひ、親の制し、
二道かくる、
云

又ふ、思ひ、親の制し、
二道かくる、
云

ありその木ハ一尺ざりありて五色ふ彩りてその

中ふ錦木詞花集あひひつひつふ立初る

錦木の千束あつてあふふも **誓旦** **起請**

かぬ 匡房外古奇あやひ **かきぬる香**

男女あひふ神文 **かきぬる香** 女のみにあつて

香のあつてのり重 **肉陣** 肉屏 **天室遺事** 揚國

ありて脱るるも **忠冬** 月常小婢 妾

の肥大ある者と前あひ行列て風と遮りて蓋あひ

人の氣を藉あひて相暖む故あひふると肉陣あひとふ **後**

宮 禁闕中美人 **美人の名** **美人と畫**

漢書王牆字ハ昭君漢の元帝の官人也云 **西京**

雜記元帝後宮既ふ多し常ふ見るとと得ると乃+

画工とて形と畫せりふ画と畫してると幸とて

諸官人皆画工ハ賂あひを巧玉昭君と遂ふ見るとと

えむ白奴朝あひ入て美人と求め関氏あひせんとも爰ふ

於て上番と案して昭君と以て行々あひ去ふ及んで

召て貌あひとるふ後官才あひとと帝とと悔あひむ

藉あひ已不定る帝信と外國あひ小重んを故ふまると人を

更む乃其事を窮案して画工と市ふ **返魂**

棄つ云漢書琴操水の説述ふ異と **返魂**

香 李夫人ハ李延年ハ妹武帝の夫人あり返魂

香の二あり世人の志るととふふとと思ふとと

空燒 薰物 留伽羅 袖の移る香 **化粧**

あせ籠 枕香炉 ころり香 **化粧**

紅粉 **白粉** **瓜紅** **的** **黛** 自掃 鉄醬

匂ひ袋 **不二額** **九額** **密男**

妹許 **ゆく** 女のゆく **紅絹** 白陀羅尼

支考が股ありこれ恋向ふわむと匂体ふふと支

夫 世ふハ東國の方 **夫** **婦** ハ **男女相互**

あふつふと称せり

あふつふと称せり

あふつふと称せり

女房によう 女房、男房かと宮人の称なり、今いま 妻をよひく女房よふ、

外とち 房ぼう 寢所あり閨中ハ、
花街はなまち 透里、乳
室の津、神奇、江口、大義、祇園町、
浅妻輪、吉原の里、鳴原の里、新町の里、
浮身宿、同輪、
遊女あそびめ うれ女、傀儡女、遊君、あ
枝家、揚屋、
遊女あそびめ 此の君、雛妓、宿出女、夜巻
辻君、女郎、を
傾城けいせい 傾城、傾國、元美人の称
これ女、一夜妻、
開卷一笑、了、髪妓、
の幼稚者、
鶉老うらら 枝桂の
紋日、水あ

げ、をい付煙草、つけとし
飲うけ
酒と飲て

比翼ひよく 座、忍しの び編笠
むう吉
原の里へ

けと付ど
かう入者泥町どろまち 今の田の茶屋ふて編笠とりのてうり
一幸八世人のゑる所ふれいんを種彦云の編笠

とくりむおのれが衣よりぶらゆくと、
手編笠まこと手前編笠ともいへり、
江戸吉原の花街中、後朝、雨ふるときハ今と賣まり、
るもと曉今といふ五元集、郭公あつき今をよせ
けつし、
其角、
七なな 八はち 瀧蕩たなだ かくて仁義礼智忠信孝悌
のハッと亡な ぶぶ 名づく、
女め

樂がく 舞姫、
伽が やや らら 江戶まで舟饅頭、大坂ふ
て、伽が やや らら 又ひんひん やや まま

野郎やろう 色いろ 陰間かげま 男色とひき
飛子とびこ 旅たび 言ことば 間ま 心こころ

神媒しんばい 正字、通路史、女媧、正姓、
嫉我、替同是、日神媒、

切字 貞享式、むりより切字の事ハ、十八字の品
あり、和哥わが 由ゆ 連哥れんが せととの沙汰あれど
例の何ゆゑやとこの故とあり、まハ、童部どうぶ の心経こころのけい、
ちりて、自己おのれ 小分別せうべつべつ、ことあり、ま、ま、中吉ちゆうきち の俳
諧はいかい、ひのくの名目あれど、ま、連哥れんが の用もち、あら
へ、ま、ま、今の俳諧はいかい の次つぎ、ま、同体別用の、ま、ひのく、ま、

るべしとあく切字の用より入る物ふ對して差別の
 義あり、とせし見せざれば均とてけて物に二ふまき故ふ
 始あり終ありて二夕一章の発句とせざるべし、元切字
 の品より入る或ハ一字の働あふやの字よの字の類
 とし或ハ餘韻の助字とせざるべし、の字むの字の類
 とし其外何誰とせざるべし、此處未と治定せざるべし
 此處動けが靜とて入る物に相對の道理あり、と
 発句の切とのしひて字を定むるふ及ぶと耶と
 せざるべし、馬とせね哉来と治定せざるべし、道理と
 せざるべし、ぬ人もおのつら発句のさへふれくもあふ我家
 ふい心切といひ中の切といひ、換抄切といひ、名わりてこと
 ふ心詞といひのせ、惟ある切字といふ、○青藍云切
 字ハ心と切、ふ意と首尾とせんが、とあふれい、と
 へ定くる切字といふこと、心切首尾といひ、さへ発句
 あり、但し心とさへり、下りふ、例ふ何故やと
 及ぶと平々の終、と、例ふ何故やと
 その將とせざるべし、作ふ自在の働有し

中の切

袖の恋やむ時、はちの朧月 芭蕉
 たぐく出ていよよ月雲

心の切

いそぐらむ、雪見かろろふ所まで、
 やうて死ぬけしきいそぐらむ、蟬の声

換抄切

世を敬ふ代りく小田の行度り
 人小家と買せて我ハ羊と心

二字切

君火ふけよき物とせし雪丸け

三字切

子供らよ、昼顔咲ぬ、瓜むる

二段切

夕も朝も、つるも瓜の花
 空経も、空也の瘦も、寒の内

三段切

梅若菜、まろ子の宿のとう汁

とまほし

青くそと有べき物と、唐くそと
 米とろく友と、今宵の月の客

おまたし

桐の木か、鶉鳴きする癖の内
 袖の花よ、昔よのめん料理の間

玄妙切

春ややぐきこともの八月と梅
 わらくと日つれあふ秋の風

大まのし

辛奇の松ハ花より臈まで、
行春とあつての人とさういふ。

無名の切

名月の花とてえて棉畠、
一家をば枝ふちら髪の基赤、

中の切も、挨拶も、二段切も、三段切も、とまゝいふも、おま
さうと、無名の切と、まづ心切あはせど、名目とていふ
ハ、初字のいふ、
口合のや 是やこの煤うさま
らぬ古格子 芭蕉

切や

朝がむや登ハ鎖か 露とく心こ
うも門の垣 全 浮世もがれや

中のや

旅とてともや浮 白奥
世の煤とらん 全 しのや や黒

法き目とあの細 全

すこのや むまんやあ甲の下
のきりぐも 全 こと

のや

庭掃て出まや寺 難波津
よちる柳 全 名所のや や田螺

冬籠 全

疑のや 梅白しきのや 雀とぬまま
しあき人の小袖も今や土用干

此や疑のや、上ハ疑のやあるときハ、下あ、こあき
嬉しき 恋しきのき文字、ありし、ミの過去の、支
字、又ハふのぬ或いたる、つるまの詞とて、結
ふあり、又くすつふむるん、のむむハ、れも唯ぞ
のや何の両用とて、るちり、くく、如く結ぶ詞のあ
らぬ、まじ、語格とて、をも、但し味のや、ハ、結ぶ詞の
らぬ、あ、あ、の、こと、あ、ひ、抄、う、あ、う、も、全、く、同
心あの詞あり、中む、う、より、ハ
あ、う、く、疑、と、う、も、と、あ、く、味、と、う、ね、と、よ、む、習、と、ま、れ
あ、う、ね、の、味、と、意、う、も、ハ、三、笠、の、山、ふ、い、で、一、月、ふ、こ、も
と、疑、ふ、意、あり、

ゆづね、てづね

願ひのうさま、
黄菊とらん

過去のし

見、
あ、あ、あ、の、い

未来のし

類、
あ、あ、あ、の、い

ふのぬ

あ、あ、あ、の、い

雑

きんぎょの思ひぬ、おもひぬ、つハ大くと
 とるのどと付らぬぬ、切るるあり、タヅとのん
 里語みわらぬり、**猿蓑**いぬく **下知の詞** 見よ
 と人おのちらふとりの暮路通
 まてじけ、本ど人小下知まる **加** 疑ひの加、い
 如くあるとつ、皆切るるあり、切るるあり、**ゆ**
 聞ゆる、見ゆる、あどり、**よ** 下知ふあらざるよ、
 べきと、聞ひ、見ひと切、**猿蓑** 鴨のぬる野
 中の杭よ **と** **奥の細道** 蛤の二見へつるまゆく
 十月 嵐雪 **と** **秋** 芭蕉 **炭俵** 八巻ことまを
 若衆ぞ大根引 **と** 寒くまどふり寝る夜を
 野城、此類のぞ **と** このりき 芭蕉 **猿蓑** 志
 むんこの藪ゆく凡そあつくりし、野童、この類のぞ
 ハ疑のやの糸ふつる、詞あて、結ぶまれば、詰格とのば
お何そ みハ勿の意あり 盃ふ **こそ** これ
 泥ふおろそ **村變** 芭蕉 **わ下**
 小けてねへめれ或ハ、つうの結び詞のあらば、
 詰格とのをも、○白魚ふ價あるこそ恨あら 芭蕉

つらへを餅そそくそね挑の花全 ○又一例
猿蓑 初とらまもと追々ふ咲をこそ **利聖**、な
ん あめひ抄 世ふ願ひのふんとつひつけされど唯ぞ
 と詠らつる詞あり、ちをちらふん、つる詞と
おもむく **同上** 今より後をそりてよ
 一云、**ん** そりてこそそるる心あり 云々 **らん**
同上 其心つらむとそるるものこと **らん**
 とるることとりをあらせてよめり、**里言** **らん**
同上 らんより、焼み見定めあづら心のわちぬぬ **理**
 あり、サウナとのる、**里言** ふわらぬ、**安野紀行箱**
 根越人もある、**けらし** けの字のそらるる
 今朝の雪 芭蕉、**けらし** うて意上ふぬぬし
まし あめひ抄 世の中ふさして櫻のあつりせむ、
 春のそらりのつけのらま、と**里言** たら
 て、蕉門の俳諧ハ俗談平話と専門とをい、あし
 とつる詞いと稀、**続虚栗** 思ふわど物笑、**めつら**
 花の隅 **ま** 行ま、きき
 其角、**めつら** りんとす、と切るる

あゆみ抄 その大むいどおしそりてつひの心あり

里言のオモキチヤ、ヤウスナヤあじのふは似る **古今**

よつと川もみちを流してあがら **あゆみ抄** ナア

つらつら錦中もさそあは **な** とふひのうら

詞ながら思ひあもまりていひてこころのふら **を**

し **曠野** 二日月のぬりのりせど花の春 芭蕉

炭俵 いそぎき春と雀のうさ **あゆみ抄** 其

袴 酒堂この類のと切る **へし** ひきちひを

あふふくわりてよきしちとあ **あゆみ抄** たりて

とそりさそあてりふ詞あり **あゆみ抄** ありのうら

まね **あゆみ抄** つひあれいゝ切

詞あり **たり、あり** 字あれは注ニ不及 **かし**

あゆみ抄 あらゆる心のうちふこと **同上** 里

よりをもて人とさとのまそら **かし** 言ふた

ノどの心とくとして落着き **あゆみ抄** 詞ありいも

ふてふいとふらぶき春うら **あゆみ抄** 詞ありいも

ふ **あゆみ抄** これい理と我よりい決せむとき人

の心ふ決定を發せさる **あゆみ抄** 詞ありい

ふ **あゆみ抄** これい理と我よりい決せむとき人

の心ふ決定を發せさる **あゆみ抄** 詞ありい

ふ **あゆみ抄** これい理と我よりい決せむとき人

の心ふ決定を發せさる **あゆみ抄** 詞ありい

ふ **あゆみ抄** これい理と我よりい決せむとき人

の心ふ決定を發せさる **あゆみ抄** 詞ありい

ふ **あゆみ抄** これい理と我よりい決せむとき人

の心ふ決定を發せさる **あゆみ抄** 詞ありい

ふ **あゆみ抄** これい理と我よりい決せむとき人

の心ふ決定を發せさる **あゆみ抄** 詞ありい

ふ **あゆみ抄** これい理と我よりい決せむとき人

の心ふ決定を發せさる **あゆみ抄** 詞ありい

ふ **あゆみ抄** これい理と我よりい決せむとき人

の心ふ決定を發せさる **あゆみ抄** 詞ありい

ふ **あゆみ抄** これい理と我よりい決せむとき人

の心ふ決定を發せさる **あゆみ抄** 詞ありい

ふ **あゆみ抄** これい理と我よりい決せむとき人

の心ふ決定を發せさる **あゆみ抄** 詞ありい

ふ **あゆみ抄** これい理と我よりい決せむとき人

の心ふ決定を發せさる **あゆみ抄** 詞ありい

神祇の格

尊さふれ御合ぬ御遷宮 芭蕉
猶さふれ花ふ明ゆ神の顔

雜

同じ類の詞ありともとの落着かハハサウデハナイ

と決定し、ヤハハサウデハナイと落着きさるこれ

自然とヤハハサウデハナイとの差別ありてさるる

古今 春の夜の闇ハあやをり梅の花色とさる

は香やハうらさるこれいせぬ

といふさる落着きさる

いふいふい

いふいふい

いふいふい

いふいふい

いふいふい

いふいふい

いふいふい

いふいふい

いふいふい

いふいふい

いふいふい

いふいふい

いふいふい

いふいふい

いふいふい

釈教の格

涅槃会や撥手合まゝ数珠の音、
灌仏の日ふ生れぬ鹿の子うね

戀の格

紅梅やまゝ恋つゝる玉簾、

無常の格

やと死ぬるまゝささげの蟬の聲、
鬼祭々つゆの焼場のまゝりうね

追善の格

秋凡ふとれてうねりき柔の杖、
當歸より哀の塚の葦草

述懐の格

つらや和脐の緒まゝく年の暮、
父母のまゝりふらひ雄の聲

羅旅の格

ひらつ脱てうらふぬぬ更衣、
年とれぬまゝきき草鞋さねふら

餞別の格

鮎の子の白魚送る別うね、
此心推せよ花ふ五器一具

名所の格

九月雨ふらぬ物や瀬田の橋、
松島や千々ふらとて夏の海

即興の格

景清の花見の座ふら七兵衛、
びりまけ杖父のまゝく角刀取

昼晷の格

棕のふらと手ふらまゝじ額髪、
降まるとし竹植る日ハ暮と笠

昼讀の格

山吹や宇治の焙炉の匂ふ時、
わらじの能諧とくぬぬ胡蝶

晝字の格

奈良七重七堂伽藍ハ重櫻、
昼顔ふひらぬせうりの床の山

時宜の格

梅白しきのゆや雀とぬぬま決、
やより木子猶やう木や梅の花

時宜といは其時小眠し其人は對して情と述るといふ
前の一章ハ野ざらしの紀行ふ三井秋風か山家と訪
ふといふ端書ありといふと林和靖は比しといふ
時宜あり後の一章ハ曠野集ふ出て細代民部々息
ふあいてといふ端書あり句意ハ笈日記ふこれハ
其父弘氏の主此道の凡雅ふ名ある故といふべし云々

賀の格

先祝へ梅と心の冬こわり、

雑の格

くろまゝが杖突坂と落馬哉、
あきよとこふ誰松島とてこ心

貞享式 今按てその名所は雜の雑句とい一句ふ其所の名と出し其風景の情とつゝあるまじき當季とむねをんせむと交情い

押字 何の木の花ともちりけ白ひえ

上ふ何とて下ふふとハ結びとてのまじき
あをとりゆく上の何と押とて

抱字 夕顔や秋のうくの瓢丸

上よやとあり下よふとハ結びとてのまじき
を秋ハのハ文字みて上のやと抱とて

増補歳時記禁草雜之部終

益子町 益子町

信孫 益子町

赤永四子 赤永四子

江戸虫林

本石町十軒店

葉屋大如

大坂查林

心高橋筋大石町

河内屋吉之助

回 唐物町

河内屋吉之助

回 安古所

河内屋和助

江都

須原屋茂之衛
山城屋佐之衛
岡田屋嘉七

尾州名古屋

永樂屋東四郎
菱屋孫之衛

勢前津

山形屋信吉傳門

京都

吉野屋仁之衛
株屋勘之衛

阿州屋島

天満屋武之衛

姫路

本莊典次

訪州徳山

浅田屋孫之衛

